

## ご挨拶



第2回日本糖尿病理学療法学会学術集会長  
松永 篤彦

この度、第2回日本糖尿病理学療法学会・学術集会を横浜で開催させていただくことになりました。本学会が設立される以前より、研究会や研修会、さらには本学会の設立にあたってご尽力された多くの先生がおられる中、集会長をご指名いただき、大変光栄に存じます。

「糖尿病に対する運動療法」の重要性が叫ばれ、実際の医療現場において、理学療法士がその業務を担当するようになったのはおよそ30年前と記憶しております。その頃は、食事療法ならびに薬物療法と並行して、運動療法（特に有酸素運動）の有用性を示すデータが数多く集められたことから、理学療法士の役割は専ら運動処方と運動指導でした。しかし現在では、診療報酬規定等の影響から、理学療法士が糖尿病のみを有する患者、もしくは糖尿病の一次予防を目的とする患者の治療にあたることは極めて希となり、本学会が掲げる「糖尿病理学療法」の臨床的意義や有用性を示すデータが乏しいことは周知のことと思います。ただし、理学療法が処方された対象患者全体に目を向けてみますと、理学療法士は生活習慣病が主な原疾患となる脳・心・血管疾患患者を日常的に高頻度で担当していることに気づきます。そして、これらの患者群に糖尿病を有する割合が高いことも概ね認識されていることと思います。つまり、「糖尿病理学療法」の有用性を示すデータが乏しいのではなく、我々理学療法士が、患者の能力障害にのみ視点を置き、その患者の病態自体に対する疾病管理に目を向けてこなかったことが大きく影響しているのではないのでしょうか。

そこで、本学術集会では、すでに糖尿病に罹患しており、その合併症に対する理学療法が展開されている対象者に焦点を当て、疾病管理としての「糖尿病理学療法」の可能性とその科学的根拠を探ることをテーマといたしました。また、上述の趣旨から、関連する複数の分化学会のご協力を賜り、共催シンポジウムを設けさせていただくことにいたしました。未だ第2回目の学術集会とはいえ、本学会が学際的にその独自性を示すことが求められていることから、多くの臨床データに触れて、その科学的根拠を見出したいと考えております。多くの会員の皆様のご参加と活発な議論を期待いたしております。